私立医療系大学における合理的配慮が必要な学生について
―A 大学の教職員を対象とした実態把握調査より―

伊賀　さくら

看護学部基礎看護学講座

2016（平成 28）年に「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が施行され，国公立の大学においては，障害を持つ学生への合理的配慮が義務となった．一方で私立の大学では，合理的配慮は努力義務となり，学生への十分な支援の在り方については各大学の運営に任されている．そこで本研究では，私立医療系大学の中で合理的配慮がされていない大学のひとつである A 大学の教員と事務職員を対象に，支援体制の現状を明らかにすることを目的として実態把握調査を行った．

対象者は，A 大学の教員 105 名および事務職員 49 名，合わせて 154 名である．手続きは，合理的配慮に関する知識，発達障害に関する知識，対象学生への対応，制度に関する意見などのアンケート調査を web 調査で行った．調査を行うにあたり，調査対象となる大学において倫理審査を受け，承認を得ている．結果は，教員 48 名（回答率 45.7%），事務職員 20 名（回答率 40.8%），全体で 68 名（回答率 44.1%）であった．調査結果の分析は，記述統計で調査項目別に単純集計を行った．自由記述については，複数人でカテゴリ分けをし，カテゴリデータとして記述し，分析した．A 大学における合理的配慮が必要な学生に対しての支援体制および教職員の認識や意識の現状が明らかとなった．また医療系大学では，臨地実習や卒業後を見据えた支援の在り方の検討も含めた医療職を目指す学生に特化した支援体制の構築が必要であることが示唆された．

病院前救急における静脈路確保に変わる手技の検討

木内 賢一，樋口 敏宏，田中 秀治，川岸 久太郎，
匂坂 量，植田 広樹，坪倉 寛明，坂梨 秀地

保健医療学部救急救命学科

【背景】救急救命士の病院前における静脈路確保の実施件数は心肺停止傷病者 123,421 人に対し 35,437 件と非常に少ない．この理由として病院前の静脈路確保が困難である事が考えられる．近年，蘇生ガイドライン 2015 でも骨髄穿刺による輸液路確保を実施が推奨されている．

【目的】救急救命士が骨髄穿刺を行う場合の問題点，特に部位により穿刺時間や穿刺成功率に差があるかを検討した．

【対象】資格取得 5 年以上の薬剤認定救急救命士 11 名を対象とした．

【方法】倫理委員会の承認のもと解剖体を用いて上腕骨頭および脛骨近位部での骨髄路確保にかかる時間，成功率を比較した．統計学的検討にはカイ 2 乗検定及び t 検定を用いた．

【結果】穿刺の成功率は上腕骨頭で 77%，脛骨近位部で 91%と脛骨で 14 ポイント高いものの有意差は認められなかった．骨髄路確保までの時間は上腕骨頭および脛骨近位部では差は認められなかったが，穿刺部位の解剖学的理解であるランドマークの触知までに烏口突起（22.9±11.7）および脛骨粗面（14.9±8.4）で 8 秒もの差が見られた．

【考察】救急救命士が骨髄穿刺を行う場合，成功率・理解度を基準とすると脛骨近位部穿刺が安全で成功率が高いと考えられた．

【結語】救急救命士でも骨髄路確保は静脈路に比べ成功率が高く，確実な輸液路確保手段と考えられた．